ふえき

時代を超えて変わらないもの

特集

2024年度福武教育文化賞贈賞式

86

公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

2024年度（第6回）福武教育文化賞

輝く未来に向けて歩み続ける
1個人、2団体へ贈る

福武教育文化賞は、高い志を持ち、先駆的で地域への波及効果がある活動に取り組んでいる個人・団体を対象に顕彰しています。第6回となる贈賞式が11月9日(土)に開催されました。式典では、受賞者の皆さまに「これまでの活動」そして「今後の目標」について映像を交えながら発表していただきました。

今年度も、素晴らしい受賞者の皆さまをお迎えすることができ、改めて岡山県の教育文化活動の豊かな広がりを感じています。

当財団ウェブサイトに受賞者の皆さまの表彰理由・活動実績を掲載しております。ぜひご覧ください。

- 木口 雄人（きぐち ゆうと）（ピアニスト／高梁市出身・ウィーン在住）
- NPO法人 科学わくわくクラブ（理事長 三宅（みやけ） 美郷（みさと）／倉敷市）
- つやま城下（しろした）ハイスクール（代表 和田（わだ） 優輝（ゆうき）／津山市）

木口 雄人氏
（ピアニスト／高梁市出身・ウィーン在住）

表彰理由

若手実力派ピアニストとして国内はもとより国際的にも高い評価を受けており、ソロ演奏のみならず伴奏者としても数々のコンクールで受賞している。日欧での活動で多忙を極めつつも、帰国の際には、地元高梁市をはじめ県内で演奏活動を行うなど、地域文化芸術の振興に貢献している。「0歳からのわくわくクラシックコンサート」や教育施設での演奏会を実施するなど、次世代を担う音楽家の育成にも大きく寄与しており、今後更なる活躍と音楽を通じての文化芸術振興への貢献が期待される。

受賞者の言葉

この度はこのような名誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。私は2016年に拠点を日本からウィーンに移し、現在は欧州やアメリカを中心にソリストや室内楽奏者として演奏活動をしております。また愛する故郷・岡山は、帰国の際にコンサートを開催させていただいておりますが、その度に人の温かさに触れ、今があるのは皆様の支えがあってこそだと感謝と初心へ思いを馳せる、これからも一生大切にしたい私の居場所です。

私たち演奏家が演奏し続ける理由というのは、会場にお越しになったお客様とのあいだに生まれるその日その瞬間だけの閃きのような音楽の化学反応を感じ合うことが、なんともいえない幸福感を皆に分け与えてくれるからだと思います。それが誰かの心を癒し、また鼓舞し、明日の活力になるのであればこれほど喜ばしいことはありません。そんな特別な瞬間を皆様に届けるため、これからも音楽家としても人間としても更なる成長をすべく精進して参ります。

お祝いメッセージ

森野 美咲 様
（ソプラノ歌手、2022年度 福武教育文化賞 受賞者）

福武教育文化賞の受賞、誠におめでとうございます！木口さんは現在、ヨーロッパを中心にデュオやソロ活動でも大変活躍されています。私たちは岡山城東高校の同級生なのですが、一緒にデュオ活動をするようになったのはウィーンへ渡ってからです。魔法のような木口さんのピアノの音色にいつも感動しています。これからも地域の方たちに本物の音楽を届けてくださることと思います！ますますのご活躍を心からお祈りしています！

つやま城下ハイスクール

表彰理由

津山市内の高校5校と津山高専に在籍する普通科・商業学科・工業学科等の様々な分野の生徒が参加し、高校生の目線で津山のまちの未来について考え、実践していく活動は、設立から間もないが、次世代育成と地域の活性化に寄与することが期待される。高校生たち自身の思いや感性をまちづくり構想に反映させることで、将来の生き方や進路を考える契機となり、キャリア教育にもつながっている。この活動は、他県においても高く評価されており、鳥取県米子市でも同様の取り組みが展開されている。高校生たちの問題解決能力やリーダーシップを養う活動の場として、今後の更なる広がりが期待される。

受賞者の言葉

つやま城下ハイスクール
代表　和田 優輝 氏

この度は、福武教育文化賞を授与いただき誠にありがとうございます。

つやま城下ハイスクールは「高校生のチャレンジがやがて未来の風景になる」ことを目指し、環境としかけがデザインされた「学校の枠を超えた学校(プラットフォーム)」として設立。まちの中で高校生が学び実践する本活動自体が大人にとってもチャレンジでしたが、市内全高校・津山市・保護者・UR都市機構のご協力、県・企業・世代を超えた皆様からの共感にも感謝が尽きません。まちづくりの観点からも津山が連綿ともつ「人を育てるまち」としての歴史的な側面にも光をあてる等、織り込んだ多彩な価値がきっと未来を照らしてくれると信じています。

これまで80名超のメンバーが関わり、一期生には社会人もいます。卒業生と運営や現役生サポート等新しい役割を模索中で「18歳の崖の克服」等の社会課題解決への糸口が見え始めました。ぜひ若い人も大人もみんなで未来の風景を見に行きましょう。

お祝いメッセージ

日下 大輝 様（つやま城下ハイスクールOB）

「つやま城下ハイスクール」福武教育文化賞の受賞おめでとうございます。私は高校2年生時に学校の先生の紹介でこの活動に出会い、現在は社会人です。活動では私達にとっての当たり前の〝地元〟を改めて見つめ直し、自分自身の学びやかけがえのない思い出を築くことが出来ました。そんな日常の中から非日常の体験を通じ、幅広い繋がりを感じ、今後の挑戦への第一歩やヒントを得ることも出来ました。そして、この想いを次の世代にも引き継いでいきたいです。

NPO法人 科学わくわくクラブ

表彰理由

理科離れ・理科嫌いへの取り組みが重要視される中、子どもたちに科学の魅力を伝えるため多彩な科学講座を開催する活動を長年続けている。メンバーには元大学教授や研究者等が在籍しており、専門的な知見や経験を活かした講座は質が高い。科学の楽しさや科学的な思考の大切さを伝えることにより、科学への関心を高めるだけでなく問題解決力の向上にも寄与しており、次代を担う子どもたちへの教育支援に大きく貢献している。

受賞者の言葉

NPO法人 科学わくわくクラブ
理事長　三宅 美郷 氏

この度は、福武教育文化賞という名誉ある賞をいただきありがとうございます。この賞を「もっとがんばれ！」というエールであると受け止め、これまで以上に熱い思いをもって活動を続けてまいります。

我々は、東日本大震災をきっかけに放送大学の学生団体として誕生しました。当時も現在も変わらぬ思いとして「子どもたちに科学の楽しさを知ってもらおう！」という気持ちを持ち続け、主に小学生を対象とした科学講座を実施してきました。

最近の数年間は、科学講座の依頼が県内の広範囲に広がり、企業や学童保育などの主催者からも依頼を受けるようになったことから、大学の枠を超えてNPO法人として科学講座を実施することを目指しました。幸い、2024年4月にNPO法人として認証され幅広い方々と連携・協業も出来るようになりました。今まで以上に多くの方とつながり、「科学の楽しさ」「科学的に考えることの大切さ」を届けていきたいと思います。

お祝いメッセージ

今中 和子 様（科学講座へ親子で参加しているリピーター）

この度は福武教育文化賞の受賞、おめでとうございます。子どもと毎月楽しく、科学わくわくクラブの講座に参加しています。特に、セミに触ったり、顕微鏡を覗いて微生物をみたりという実験に子どもたちは目を輝かせています。本の知識だけではなく、実体験できることは貴重だと思います。家では図鑑を開き「クラブで見たのが載ってた！」と、学びが深まっています。いつも子どもたちがワクワクする講座を開いていただきありがとうございます。これからも親子共々、楽しみながら学んでいきたいです。

2023年度に助成を受けた団体・個人による成果報告

2024年度 教育文化活動助成 成果報告会

活動事例を知って、仲間とつながって、お互いに学び合う日

参加しやすいオンライン成果報告会

32団体がオンラインで活動報告 延べ244名が参加

8月31日から4日間にわたって開催したオンライン成果報告会は、延べ244名が参加。参加者アンケートでは「県内で多様な活動が展開されていることがよくわかり、審査委員のコメントも参考になりました」「多様な活動があり、報告書だけではわからない熱量や具体的なことが知れた」「短時間で活動内容がわかりやすくまとめられている」「初めて知る活動も多く、勉強になった」などの回答が多くみられ、助成対象者の活動や思いを知っていただく良い機会となったことを実感しています。

また、今年度は成果報告後、資金調達をテーマに自由参加のオンライン交流会を試みました。参加者は少なかったのですが「オンライン交流会で得るものは多かった」「決定的な対策はないが、いろいろ知恵を交換できたのではないか」「互いの団体の様子がよくわかった」と満足度は高かったようです。

これまでのオンライン成果報告会での発表動画は、財団公式YouTubeからご覧いただけます。現在約100本の動画がアーカイブされています。活動の参考に、ぜひご覧ください。

The World Kitchen 実行委員会
The World Kitchen ～多文化交流の輪を岡山に～

にじーず
LGBTの児童生徒の孤立予防および教員・支援者のネットワーキング

NPO法人永瀬清子生家保存会
「いつかだれかにわたしの思いを」詩を堪能する場づくり活動

ゴールデンリバー53
爺婆の孫プロジェクト

LOOP⑩
E&A、Dブレイクスクール・プロジェクト2023#0

高梁100challenge
高梁市の学生主体の地域活性プロジェクト創出&伴走プログラム

みんなの第九プロジェクト
第3回みんなの第九音楽会

NPO法人企画 on 岡山
高齢者と手話者と子どもたちが一緒になって創る新たな舞台

旧和気小学校みんなで放課後合宿実行委員会
旧和気小みんなで放課後合宿

牛窓話茶会えいとう市実行委員会
アート作品と対話鑑賞を通して結ぶ「牛窓」集いの場作り

居場所作りネットワークINE
外国にルーツをもつ家族の居場所と多文化共生ネットワーク作り

美作大学調理師会
地域食材を使った大学生によるみまちょーレストランの開催

専門学校ビーマックス造山古墳チーム
熱気球から眺望する造山古墳群

せとうちこども合唱団ティンカーベル
ありがとうプロジェクトPV「歌でつなぐ瀬戸内市の人々」

霜月祭実行委員会
地域の伝統文化を後世へ。持続可能な活動のための仕組みづくり

ひとづくり・まちづくりフォーラム実行委員会
旅するひとづくり・まちづくりフォーラム2023

福谷農家博物館
昔の農機具などを民俗資料としてそれらを生かした体験活動

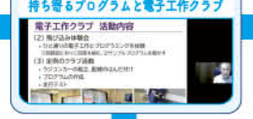
奉還町近過去アーカイブプロジェクト実行委員会
近過去から未来に繋ぐ奉還町歴史マップ作成プロジェクト

kojo-kojo(興除向上)委員会
郷土の歴史を語り継ぐための興除新田開発200年記念演劇

Cube
演出家、劇作家を育てるためのワークショップ、演劇公演の開催

おはなしのWA♪
児童等の参加による絵本「ブラザードック」の歌の披露イベント

大井地区連合町内会 里山活性化研究会
世代を超えてアイデア・知識を持ち寄るプログラムと電子工作クラブ



レプタイル株式会社
Okayama Tech Award for Kids2023

Kojima Kids Art :)
自由なモノづくりを通じてこどもたちの創造性を育む活動

神代和紙保存会
神代和紙保存伝承プロジェクト

岡山県美作高等学校 福祉医療コース
地域活性化交流活動 ～地域福祉課題解消プログラム～

NPO法人 無花果
「ゲーム×医療×教育」をテーマにしたイベント・相談会の開催

建部獣皮有効活用研究所
「ジビエを学ぶクラフトキット」制作

夢の降る街実行委員会
ミュージカル「星の王子さま」公演

あい音
子どもの感性を育む「音楽パーティ♪」～本物を体感する空間～

一般社団法人 歴史新大陸
天神町の甚九郎稲荷伝説の演劇上演

参加者アンケート結果

Q.1 助成対象者による発表にはどのくらい満足されましたか？

Q.2 ご自身にとって役立つ内容でしたか？

Q.3 成果報告会後の「オンライン交流会」へは参加しましたか？

Q.4「オンライン交流会」はどのくらい満足されましたか？

審査委員　藤井裕也さん
特定非営利活動法人 山村エンタープライズ 副代表理事

助成を受けたみなさまが工夫を凝らしながら活動を発展させ、助成を受ける前と後を比べて深みを増した活動を実現している様子を見ることができました。

また、助成金を受けたことがきっかけとなり、団体同士それぞれのネットワークが広がり、新たな連携や交流が生まれていることも素晴らしい成果だと感じました。

参加者の声

- 報告書を見ながら、それぞれの活動の目的や成果等を伺えて、視野が広がった。
- これからの活動を続けるヒントや元気をいただいた。
- 岡山における教育・文化活動の現状の一端を知ることができ、課題などもより明確になった。
- どの団体さんも独自性のあるおもしろい活動ばかりで、勉強になった。
- 熱意が周囲を動かすと感じたこと。活動には、工夫が大切であることを改めて感じた。
- 色々な分野で、こんなにも多くの人たちが熱い思いをもって活動していることに感動！
- アイデアは大事、人も大事、資金は最も大事
- 連携先になりうる可能性がある団体を知ることができた。
- 活動については、常に「見直す気持ち」が大切！マンネリになっていないか？
- 次年度の報告をどのように行ったらいいか参考になった。
- 参加しやすく、途中で抜けたり戻ったりもしやすいので、大変助かる。
- オフィスに居ながらにして、ごく短時間の中であんなにもクオリティの高いヒントがいただけるチャンス。
- 助成活動の中には、他との連携や学校等へ周知したいものもあり、今後案内したい。
- 知らなかった取り組みを知ることができた。
- 質問事項を予めチャットなどで募っておいて、それを事務局が拾い上げていけばいいのかなと思った。

信頼関係が築きやすい**対面形式**による成果報告会

6団体がステージで発表 約200名が参加

グループ交流 ＋ 交流会

9月28日に開催した対面形式による成果報告会及び交流会には約200名が参加。参加者同士の交流が更に活発になるような会にしたいと、今年度はお隣の席の方との自己紹介からスタート。また、発表について質問や感想を書いてもらうシートを準備して発表者へのフィードバックを試みました。「10分で6件の成果報告の時間配分は、適切であった。報告ごとに質疑・感想シートに記入する方法はよく工夫されている」と参加者からの声。

6団体の成果報告後は、発表団体を囲んでグループ交流の時間を設けました。「適度なサイズのグループでの質疑応答や意見交換により、活動に対する理解を一層深めることができた」「今後の活動にプラスになる情報も得ることができた」「関心を共通する近くの方と繋がることもできました」などの声もいただきました。

そして最後は全員による交流会。「県内の多種多様な活動団体が一堂に会して立食形式で交流できる機会はほとんど見当たらない。今後も是非とも継続していただきたい」「多くの方と交流ができました」「情報交換や交流を通じ生の声が聴ける。聴く側、話す側、それぞれがまたやる気を起こしてくるという相乗効果を生んでいると思う」

閉会を過ぎても多くの方が交流を楽しんでいる様子を見ていると、直接会うことの意義の大きさを改めて感じました。

今後も有機的なつながりが生まれるような成果報告会及び交流会にしていきたいと思います。

成果報告会

アグリ魅力化志援会
農業のイメージアップを図る

いのちのおはなし岡山
こどもたちへ「いきるちから」を伝えよう

備前福岡の市圏地産地消推進協議会
地産地消学校給食と連動した瀬戸内市の食育体験学習の推進

白石踊会
高校生アイデアを生かす白石踊継承活動

NPO法人 勝山・町並み委員会
チェロ奏者・谷口賢記のアウトリーチとコンサート

NPO法人 まんなか
多世代交流 みんなの広場 まんなか

Q.1 成果報告発表は、いかがでしたか？

- ★★★ 22人 52.4%
- ★★ 14人 33.3%
- ★★★ 4人 9.5%
- ★★ 1人 2.4%
- ★ 1人 2.4%

■報告ごとに質疑・感想シートに記入する方法は良く工夫されている。■他団体の活動の様子を、実際に顔を見ながら短時間で効率よく知ることができた。■団体それぞれの思いが身近に感じられた。■其々の団体の真摯な取り組みを拝聴できたことも良かったし、財団の多岐に渡るサポートに感銘を受けた。

Q.2 ご自身にとって役立つ内容でしたか？

- ★★★ 19人 45.2%
- ★★ 20人 47.6%
- ★★★ 2人 4.8%
- ★★ 1人 2.4%
- ★ 0人 0%

■報告書では把握しづらい想いと強調点を感じられる場だった。■勇気をいただいた！■自分の活動とジャンルは違うが、どこも自走に関する課題（人出、資金）は同じなんだなと思った。■様々な事業活動のアイデアに触れ、よい刺激になった。■活動の意図や状況がよくわかった。

Q.3 成果報告発表について、ご意見、ご感想をお聞かせください。

■全体の運営がよく工夫されており、和気あいあいとした雰囲気の中で引き締まった感じもあり、満足度は非常に高く参加して良かったと思った。■どれも参考になる話ばかりでとても勉強になった。■始まる前のあき時間に映像を流してもらったらわかりやすかったかも。■今回のようにオンラインと対面、両方があると遠方の方も参加しやすいと思った。■それぞれの団体の特徴がわかって面白かった。

グループ交流

参加者を囲んで質疑応答

Q.1 グループ交流会は、いかがでしたか？

- ★★★ 18人 42.9%
- ★★ 14人 33.3%
- ★★★ 9人 21.4%
- ★★ 1人 2.4%
- ★ 0人 0%

■多くの方と交流できた。■成果報告のみで終わるのではなく、適度なサイズのグループでの質疑応答や意見交換により、活動に対する理解を一層深めることができた。■内容毎に興味のあるメンバーが集まることで深いやりとりを聞くことができた。■活動により理解が深まります。参加者同士、新しい出会いがあるのもうれしいです。■2団体しか回れず、質問したいことが聴けなかった。■時間が足りなかった。

Q.2 グループ交流会の開催について、該当する項目をお選びください。

- ■今後も続けて欲しい 76.6%
- ■なくてもよい 4.6%
- ■どちらでもよい 11.8%
- □その他 7%

Q.3 グループ交流会ついて、ご意見、ご感想をお聞かせください。

■全体の交流より、まとめて質疑応答ができる。■こぢんまりとした交流の場が確保されることで深まると感じる。■全体発表では言いにくいことを教えてもらえたのはグループ交流という小さい単位ならではだったと思う。■同じような悩みに対して、参考になるやり方や、情報をいただけた。■直接お会いして意見交換や交流することの意味は大きい。■実際に会って話すと、それぞれの情熱に心動かされた。

審査委員　吉川 幸さん
岡山大学　教育推進機構 准教授

成果報告会に参加して嬉しいと思えることのひとつは、ご縁のつながりだと思います。各団体の活動報告や持ち寄られたチラシについて話すうちに歓談の輪が広がり、手の込んだ料理に笑顔が重なり、誰かと誰かの話からまた別の誰かにと紹介が広がっていきます。優しい波紋のようなつながりです。立場や世代を超えて、優しい社会の実現に向けてはたらきかけていこうとするパワーがあふれているように感じます。

交流会

Q.1 交流会は、いかがでしたか？

- ★★★ 20人 51.2%
- ★★ 14人 35.9%
- ★★★ 4人 10.3%
- ★★ 1人 2.6%
- ★ 0人 0%

■県内の多種多様な活動団体が一堂に会して立食形式で交流できる機会はほとんど見当たらない。運営は大変かと存じますが、今後も是非とも継続していただきたい。■情報交換や交流を通じ生の声が聴ける。聴く側、話す側、それぞれがまたやる気を起こしてくるという相乗効果を生んでいると思う。

Q.2 初めての団体と交流できましたか？

- ■できた 95%
- □できなかった 2.5%
- □どちらともいえない 2.5%

Q.3 交流会での情報交換はできましたか？

- ■今後の活動につながるような交流ができた 90%
- ■充実した交流・情報交換があまりできなかった 2.5%
- ■交流や情報交換はできた 2.5%
- □簡単な活動内容を話す程度だった 2.5%
- □直接つながるまではいかないが、刺激を受けた 2.5%

■自分たちの活動に役立つアイデアをもらえた。■沢山の団体がいらっしゃった中で、今後繋がりたいと思った団体に声をかけることができた。■実践からの助言を頂くことができ、大変参考になった。■今後の活動につながるご縁が出来た。■チラシなどの用意ができておらず、こちらが準備不足であった。■お互いの活動のヒントと刺激になった。■審査委員等も名札を備えていたほうがより活発になるのではないかと思った。

ハロー！ミュージアム

見学レポート

「岡山県の小学生全員が、卒業するまでに一度は美術館を訪れ、本物のアートに出会い、わくわくする体験をしてもらいたい」

そんな思いから始まった、ハロー！ミュージアム事業。この度、真庭市立川東小学校にお邪魔し、事前学習・美術館訪問・事後学習の全3回の授業を一緒に体験させていただき、また、美作市立勝田東小学校の事後学習を見学させていただきました。その様子をレポートします。

黒部麻子

対話型鑑賞をプレ体験

10月11日、川東小学校4年生の教室に、大原美術館の学芸員・長谷川祐里さんがやって来ました。美術館鑑賞を楽しむための事前授業です。

「質問です。美術館は、どんなところでしょうか？　どんな雰囲気だと思う？」

長谷川さんがそう尋ねると、あちこちで手が挙がります。

「ちょっと静かな雰囲気」

「お上品」

「すごい絵があったら驚くかも！」

大原美術館の歴史についても、長谷川さんが説明します。児島虎次郎が、ヨーロッパのすぐれた作品を日本に紹介するため、大原孫三郎の出資で買い付けをしたという話では「孫次郎のお金がなくなっちゃう！」

そんな声も上がり、笑いが起こりました。

そして、作品鑑賞が始まります。

「これからみんなで一緒に作品を見てみたいと思います。正解はありません。間違っても大丈夫なので、自分が感じたことを教えてください。お友達が言ったことも、否定しないで、おもしろい答えだなって思いながら作品を見てほしいと思います」と長谷川さんが、対話型鑑賞の説明をします。

スライドに映し出されたのは、ピサロの「りんご採り」（1886年）。作者や作品名は伝えず、絵だけが映されます。

手前の人は何を食べているのか？という質問から始まると、りんご、柿、みかんなどの意見が。次に、この人たちは、何をしているのか？との問いかけには、

「上を向いてる人は収穫してる」

「しゃがんでる人は、落ちて潰れたりんごを回収してる」

「手前の人は、木に隠れてコソコソ食べてる」

「かごに肘ついてるから、堂々と食べてるんよ」

「腐ってないか確認してるんじゃない？」

先に出た意見をもとにイメージをふくらませたり、こういう理由で自分はこう思った、という筋道立った考え方ができていたり、そうした変化が自然に起きていました。

季節は？という問いには、夏と秋とで意見が分かれました。そう思った理由として、夏派からは、木の葉が落ちていない、日なたと日陰の色が濃いから暑そう、などの意見が。秋派の子どもたちからは、長袖を着ているから、りんごや柿は秋の果物だから、という意見が出ました。

意見を言い合っているうちに、こんなにたくさんのことを絵から感じ取ることができるんだな。そう感じた事前授業でした。

大原美術館へGO！

10月29日、いよいよ大原美術館の見学です。バスで子どもたちが到着すると、注意事項の説明の後、2グループに分かれて見学が始まりました。

対話型鑑賞1作品目は、カンディンスキーの「尖端」、抽象画です。まずは30秒間この絵を眺めてから、どんなものがこの絵に描かれているのか、意見を出し合います。

「風船みたいなのが左下にある」

「ビー玉みたい」

パーツに関する意見がひとしきり出た後、

「全体を見た時に、何か物語が

見えてくるかな？」
という問いかけが。すると、
「生活で使うものがたくさんあって、で、なんか盛り上がってる。集まって一緒にパーティーみたいな」
そんな豊かなイメージが語られ、早くも対話型鑑賞の力を実感します。
2作品目は、児島虎次郎の「初秋」です。
「真ん中に人がいて、植物をたくさん育ててる」
「お花は、赤、オレンジ、ピンク、緑もある」
「奥に柵があって農園みたいになってる」
ファシリテーターの方が、「まだまだ想像してみよう」と声をかけると、子どもたちからは一層活発に意見が出ます。
「この人は、韓国の女の人じゃないかな。韓国の服みたいだし、うちわも日本っぽくない」
そんなふうに2作品を見た後は、館内を自由に鑑賞します。一つの作品をじっと見つめている子や、先生やお友達と感想を言い合っている子。みんな、思い思いのスタイルで美術館を楽しんでいました。

事後学習で、アウトプットを

11月26日の事後学習では、大原美術館見学の振り返りから始まり、対話型鑑賞へ。
この日、長谷川さんが用意した作品の一つは、シニャック「オーヴェルシーの運河」でした。大原美術館で見たことを覚えていた子どもも多く、歓声があがります。スライドで絵を拡大すると、
「つぶつぶ！」
「紙で貼ってるみたい」
「レンガを積み上げてるみたい」
といった感想が出ました。
「実はこれ、ひとつひとつ筆でちょんちょんってしながら描いてる。ちょっと難しくいうと、点描画法っていいます」
長谷川さんはそう解説し、同じく点描による他の作品も紹介。同じ点描でも、細かさの違いなどで、雰囲気が変わることも学びました。
なお、アウトプットに主眼をおく事後学習では、川東小学校のように対話型鑑賞を選択する学校もあれば、制作発表をする学校もあるとのこと。そこで、後者について、12月10日に行われた勝田東小学校の事後学習の様子を見させていただきました。
美術館で各自購入した絵葉書を画用紙に貼って、絵葉書の周りの世界を想像して描いてみようというものです。
シニャックの運河のまわりに広がる風景を、ちぎり絵で表現した子や、モネの睡蓮の絵葉書を選び、美術館の睡蓮の池や美観地区を歩いた時の思い出を絵にした子もいました。フォンタナ「空間概念　期待」に触発されて、自分も画用紙をカッターで切ってみたという子は、切っただけでは見えにくかったので後ろに画用紙を貼ったとのこと。もう一人、同じく「空間概念　期待」を選び、切り口が猫の爪痕のように見えたので猫の手を描いたという子もいました。長谷川さんが「この赤を出すのは難しかったんじゃない？」と聞くと、単色ではなく、ちょっと混ぜて色を近づけたとのこと。
みんなそれぞれ、自分のイメージを表現するための手法を、工夫しながら身につけていたことに感心しました。

対話型鑑賞の力

今回、取材して感じたのは、やはり対話型鑑賞っていいな、ということです。気の利いた意見を言わなくちゃとか、余計なことは考えず、感じたことを安心して自由に話せる環境で作品を鑑賞すると、気負わなくても深い見方ができるんですね。それが自分の表現力にもつながっていく。
そこには、ファシリテーターの力によるところも大きいと感じました。長谷川さんによると、「受ける質問」と「受けない質問」とがあるそうで、あまり抽象的な質問になりすぎないのがコツだそうです。
また、子どもたちの発言の一つひとつに、長谷川さんは丁寧に言葉を補っていました。「ありがとう、こういう意見を言ってくれましたね」と、長谷川さんが自分の発言を受け止めて、単語から文脈に変えてくれる、あるいは背景知識に結びつけてくれる。これは、とてもゆたかな言語体験なのではないでしょうか。
小学生の子どもを持つ保護者としては、ハロー！ミュージアムに参加できる小学校が羨ましい限りです。対象エリアの学校の方には、ぜひこの機会を活用して、ゆたかな経験を積んでいってほしいなと思います。

黒部 麻子（くろべあさこ） ライター。1981年東京都生まれ。早稲田大学法学部卒業後、出版社に勤務。2011年の東日本大震災をきっかけに、翌2012年に岡山県に移住して、フリーランスに。取材、執筆活動のほか、現在は地域活動団体の広報なども手掛けている。

瀬戸内スタディツアー2024

実施報告

「島とアートを巡る冒険の3日間」

松原　龍之

瀬戸内スタディツアーは、瀬戸内海に浮かぶ島々を中高校生が巡る3日間。瀬戸内国際芸術祭サポーターの「こえび隊」が犬島・直島・豊島をナビゲート。学校も年齢も違う子どもたちがチームになり、島を歩きアートに触れる。今年度のツアーは、子どもたち一人一人の感性に委ね、既知のゴールは設定しない。夏の暑い日、船に乗り島に渡る。仲間ができ、アートに向かう。「島」と「アート」が子どもの心に、どんなものを創造させたのか。芸術祭のコンセプト「在るもの活かし、無いものを創る」を体感するスタディツアーとなった。

記録的な猛暑の中、総勢50名以上の中高生が参加した。
「島」と「アート」を通して子どもたちが感じた夏をWEBページで公開中。
あなたも冒険を追体験してください。

1

INUJIMA

犬島コース

循環型社会を体験する旅

7.29（月）

犬島に残る銅製錬所の遺構を
保存・再生した犬島精錬所美術館や
犬島くらしの植物園での
ワークショップを通して
循環を体験する旅

大きな地図を広げ、目的地を指差す。犬島は、周囲4キロの小さな島。この小さな島にはなぜか謎が多い。そもそも犬島となぜ呼ばれるようになったのか。島を歩けば、不思議なものに出合ってしまう。島のあちら、こちらにある大きな池、島を護る城壁のような石柱、黒く光るカラミレンガの要塞、犬島精錬所美術館や家プロジェクトのアート作品たち。

こえび隊がくれる情報だけでは、ここは攻略できない。身体の感覚を研ぎ澄ませろ。風はどっちから吹いている？この草花は食べられる？見えている世界を疑え、身体からの情報で脳内補完していく。

仲間と言葉を交わせば、自分とは違う世界の存在に気付く。同じ場所、同じ時間にいるはずの仲間に別の世界があるのであれば、違う時間を生きた先人たちが見えていた風景もまた、パラレルに存在する。これはツアーではない、アドベンチャーだ。

2

NAOSHIMA

直島コース

内生する旅

8.8（木）

ベネッセハウス ミュージアムでの
作品鑑賞や家プロジェクトを
散策しながら自己理解を深め
多様性に気づく体験の旅

直島にアートがやってきて約30年。その頃から変わらない青い空、青い海。この島に来るまでは、なぜ青いのか考えたこともなかった。アート作品は、私に説明なんてしてくれない。仕方ないので立ち止まり、じっと眺めてみる。場所を変えてまた眺めてみる。やっぱりなんなのか、わからない。時間がたって、ふと思う。なんでこんなアート、作ったのだろうか？変なの。きっと変な人が作ったのだ。私ならそんなことしない。こんなことしたら、変だと思われるじゃない。ここも変だ。変なところがあるのがアートなのか？アートってよくわからない。アートといる時間が、私とアートの距離を近づけていく。

まちを歩けばアートが現れる。この島で暮らす人には、どんな風に見えているのか？私がさっきまで変だ、変だと言っていたアートが、日常の中にある。アートがある日常が、当たり前。変なアートが日常だとすれば、私の日常は何なのだろう？ふと見上げた青い空。これは日常なのか、アートなのか。

3

TESHIMA

豊島コース

島の歴史をみつめる旅

8.22（木）

瀬戸内海を望む豊島唐櫃の
小高い丘に建設された豊島美術館と
産廃処分地を巡り
豊島の今と昔を体験する旅

豊島は、人が住む前から豊島だった。上陸した私たちは豊島事件の現場へ。デコボコ道をバスは進む。立入禁止の看板と鍵のかかったゲートが、外とは違う時間の流れを感じさせる。日本最大級の産業廃棄物が不法投棄された現場は、嘘のように静かだった。緑は色濃く、海も空も青かった。ただ不自然に掘られた四角形の池、どこに電気を送るのかわからない送電線。「豊島のこころ資料館」には、人間の過ちと差別、浄化の時間が記されていた。逃げ出したくなった。

豊島はゆたかな島。豊島美術館はまるで森の中にいるように、遠くで歩く人の足音が聞こえ、場所によって流れる風が違う。何かを探し歩き回る人もいずれ佇み、寝転がる。同じ空間にたくさんの人がいるのに、一人でいることが心地よい。水が生まれ、生きものように動き、くっ付き、佇む。豊島が豊島になる前から、存在していた場所のように感じられる。人は豊島の姿を変えてしまったけれど、豊島を豊島に戻そうとしている。豊島はずっと昔から豊島だったのだから。

松原　龍之（まつばら　たつゆき）
1977年倉敷市生まれ。2014年、岡山経済新聞の編集長に就任。高梁川流域学校理事、北長瀬エリアマネジメント理事、岡山ペンクラブ所属。まちと関わり、人の話を聞く人。

僕が、活動をはじめた理由

「モノづくりの楽しさ味わう場づくり」

文・稲葉 剛　Kojima Kids Art :)

家族で東京から倉敷市児島に移住してきたのが2021年3月。移住から2年目の秋に児島市民交流センターで開催したイベントが、こどものためのモノづくりイベント「CREATIVE PARK」でした。

普段から自分たちのお店や造形教室で地域の方と交流をしていたのですが、もっと周りの人たちを巻き込んでとにかく楽しい場を作ろう、と考えて出てきたのが「こども」、「モノづくり」というキーワードでした。児島は繊維業を始めとして、モノづくりの土台がある土地なので、そこで育つこどもたちにモノづくりの楽しさを味わえる場を作ることで、より良いものや新しいことを創造する力が次世代に繋がっていくのではないかと考えました。

最初の「CREATIVE PARK」は、移住後に知り合った方たちに協力をお願いしたり、地元の企業を紹介していただいたりと、周りの方々の協力により無事開催することができました。初めてのことで、こどもたちが集まってくれるか心配だったのですが、当日になったら、用意していた段ボールが早々になくなって近くのお店に集めに回るなど、嬉しい誤算があったことが懐かしいです。

「CREATIVE PARK」の開催をきっかけに、こういった場を継続的に作っていくことが大切だと思い団体としての活動を開始しました。少人数での運営ですが、手伝ってくれる方が沢山いるおかげでイベントやワークショップを行うことができています。

今後、活動を続けていく先で、活動に触れたこどもたちが成長した時、こどもの頃のモノづくりの体験が少しでも良い刺激になっていたら良いな、と思っています。

そういった意味でも長く活動を続けていきたいです。

Kojima Kids Art :)

自分で完成図や制作プロセスを考えるワークショップやイベントなどを開催。こどもたちが創造力や感性を育み、自由な発想で思い切りモノづくりが楽しめる場を提供。また制作に使う素材を地域企業から提供していただくことで、こどもたちと地域企業をモノづくりで繋げる。

夏休みワークショップ「探検！博士と一緒にゴブリンを見つけよう！」の様子

こどもたちが自由な発想でモノづくりを楽しむ「CREATIVE PARK vol.2」の様子

私が、活動をはじめた理由

「食イベントを通して多文化交流」

文・岡田 栞那　The World Kitchen 実行委員会　代表

私は瀬戸内海に浮かぶ人口約2000人の島 中島（愛媛県）で生まれ育ち、幼いころから家には毎年アジアの国々から来た農業研修生がホームステイをしていました。そんな環境から日本における外国人技能実習生の課題に関心を持ち、「将来は、中島で外国人技能実習生 ×まちづくりの事業を立ち上げ、故郷の島から多文化共生のモデルをつくりたい」と思うようになりました。

そして、ローカルかつグローバルな環境で学ぶことができる岡山大学グローバルディスカバリープログラム（GDP）に進学し、英語を共通言語に育った環境も国籍も話す言語も十人十色な学生と学ぶ中で、日々自分の価値観や考えがアップデートされています。

将来へのステップとして岡山のまちでも何かしたいと漠然と思っていた時、岡山市主催の岡山城主要跡地ワークショップに参加しました。同じテーブルになった地域でまちづくりに携わっている社会人の方に自分のビジョンと岡山で何かやってみたいということを伝えると、その方々が以前やられていたThe World Kitchenをやってみないかというご提案を頂き、岡山に来て4カ月目で何も分からない中でしたが、いただいたご縁と自分の好奇心を大事にしたと思い、〝とにかくやってみよう〟と活動がスタートしました。

ダイバーシティな環境で学んでいるGDPの学生がまちに進出し、多文化交流のきっかけとなるこのイベントを開催することに大きな意義を感じていると共に、食が繋ぐ多文化との出会いが、地道ながらも岡山のまちを豊かに、そして面白くしていくことを信じてやみません。

The World Kitchen 実行委員会

まちのなかで、様々なバックグラウンドを持つ市民がコミュニティの垣根を超えて交流するきっかけを提供するワールドフードイベントを実施。県内の世界各国の料理を提供する飲食店・団体が出店する大規模なイベント『The World Kitchen』と1ヶ国をピックアップしてその国のゲストと共に料理を作る小規模のイベント『Mini The World Kitchen』を通して、日常的な多文化交流に繋げる。

高島地区の中学生ボランティア「高島地域づくり隊」とのMini The World Kitchen

石山公園で開催した
The World Kitchen2023 in Spring

岡山スケッチ vol.3

センス・オブ・ワンダー

文　山田　哲弘

私の生き方に強く影響を及ぼした本の一節を紹介します。「地球の美しさと神秘を感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることは決してないでしょう。たとえ生活のなかで苦しみや心配ごとに出会ったとしても、かならずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たな喜びへ通ずる小道を見つけだすことができると信じます。地球の美しさについて深く思いを巡らせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力を保ち続けることができるでしょう。」

この本の名前は『センス・オブ・ワンダー』。アメリカのベストセラー作家であり、海洋生物学者でもあったレイチェル・ルーイズ・カーソンが書いた本です。彼女は『沈黙の春』という本で化学物質による自然界への影響をいち早く警告した科学者でもあります。

センス・オブ・ワンダーを日本語に訳すと「自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性」。例えば、「瀬戸内海を真っ赤に染める夕焼け」「真っ暗な空に輝く満天の星」「路傍にひっそりと咲いている真っ白な花」を見た瞬間、「綺麗だなぁ！」「美しいなぁ」と感じる感覚、新しいものや未知なるものに触れた時のワクワク！ドキドキ！の感動など、子どもの頃、私たちが「普通」に持っていた感性のことです。まさに地球の美しさと神秘さを感じとる力と言えるでしょう。

子どもたちと一緒に自然観察をしていると「てっちゃん先生！キラキラした石があるよ！」、「このお花，かわいい♪」、「この葉っぱ，ふわふわ！」など、どんどん言葉が溢れ出します。その言葉のひとつひとつが子どもたちの素晴らしい感性であり、私はこの言葉をとても大切にしています。そして、子どもたちから発せられた言葉はその場ですぐに、参加している子どもたち全員で共有するよう心がけています。そうすることで、子どもたちの感性がどんどん磨かれていくと感じているからです。

さて、大人はどうでしょうか。これは私の感覚ですが、子どもから大人に成長するにつれて、前例や社会的な常識で感情をコントロールされることが多くなるため、この感性は心の奥に追いやられてしまう傾向が強くなっているのではないかと感じています。つまり言語や論理などの左脳系の思考になってしまうということです。

この素晴らしい感性は大人に必要ではないのでしょうか。いいえ！私は大人だからこそとても大切だと思っています。

右脳系の思考がセンス・オブ・ワンダーそのもの。これは日々の暮らしを豊かにする感性であり、今の社会を生き抜くために大切な感性だと感じています。

地球環境問題は日々深刻さを増してきています。遠い世界の話だと思われていた地球温暖化も、台風の巨大化や豪雨などにより日本でも大きな被害が発生しています。地球環境問題の解決は社会的、経済的な問題が複雑に絡み合っているため一筋縄ではいきません。しかし、地球の美しさと神秘さを感じとる力であるセンス・オブ・ワンダーをすべての人が思い出せば、大切な地球を壊すようなことはしないと私は確信しています。私自身、この感性を大切にすると同時に、身近な自然体験を通して多くの方にその大切さを伝え続けていこうと思います。

山田　哲弘（やまだ　てつひろ）
岡山の自然を愛する53歳。1994年、公益財団法人岡山県環境保全事業団に入団後、県内の野生動植物調査や県版野生生物目録・レッドデータブック作成に携わる。2023年5月、イオンモール岡山6階にオープンした環境学習プラザ「アスエコ」所長に就任。展示やイベント、講演活動を通して、環境問題や地球の大切さを伝えている。

シリーズ Face

取材・文　森分 志学

劇作って一体なんでしょうか。

戯曲をつくる、演劇と生きる。

角ひろみさんは20歳のときに関西で劇団を立ち上げ、10年間の活動の後、結婚を機に岡山に移住しました。縁あって岡山でも劇作家の活動を続け、2015年に「第16回岡山芸術文化賞」準グランプリを受賞。最近では、朗読劇の演出や高校生の戯曲創作などにも挑戦しています。劇作家・演出家の角さんから見える、劇の世界についてお伺いました。

劇作家・演出家
角 ひろみ
Sumi Hiromi

1974年、兵庫県伊丹市生まれ。宝塚北高校演劇科卒業。関西にて1995年芝居屋坂道ストア旗揚げ。2001年解散。2008年より岡山在住。東京や関西や岡山など各地の団体に台本を書き下ろして活動。演出・ワークショップ講師・審査員等も多数。2014年「狭い家の鴨と蛇」で第20回劇作家協会新人戯曲賞 受賞、2014年「囁谷シルバー男声合唱団」で第59回岸田國士戯曲賞 最終候補、2015年 第16回岡山芸術文化賞準グランプリ受賞。

角ひろみさん

角さんの初めての受賞作品は1999年、『あくびと風の威力』。阪神淡路大震災をテーマにした作品で、自身も被災者の一人でした。その頃、震災の痛みや追悼を伝える作品が多く作られるなか、違和感を抱いていた角さん。渦中にいる私は、ある種の麻痺状態、何も感じない。そんな等身大の自分を表した『あくびと風の威力』は、被災者たちが数年後の同窓会で震災を振り返るなかで、当時果たせなかったことや実は失っていたことに、時間が経ったからこそ初めて気づいていく物語です。こうした等身大の視点や冴えない日常にある輝きを表現する趣向は、その後の作品にも通底しています。

活躍の他方、演劇を続けつつ家庭や子どもをもつことの困難も感じていた角さんは、岡山移住を機に劇作家を辞めます。岡山に移り住んでからは、デザイン会社に就職。ディレクションの仕事に朝から晩まで従事する生活を続けていたとき、第4回近松門左衛門賞受賞の報告が届きます。受賞作品『螢の光』は、関西を離れる直前、演劇の全てを捨てるつもりで作り、決別の意味で応募した作品でした。

受賞作品が関西で上演されることになり、デザイン会社を退職。再び劇作の道に舞い戻ることに。子育てとの両立を考え、フリーの劇作家・演出家になります。東京・大阪での仕事に加えて、岡山でも作品づくりを始めます。今年の「おかやまアーツフェスティバル2024」では、朗読劇と文学と音楽を掛け合わせた「劇場で出会う文学」を企画。岡山出身の作家・小川洋子さんの短編集を女優・神野三鈴さんとドラァグクイーンのドリアン・ロロブリジーダさんが朗読することで、演劇以外の分野からも観客を取り込むことができました。

その成功は、企画の秀逸性だけにありません。幼い頃から音楽が身近にあった角さんの演出は、ご自身の音楽性や空間認識、特異な感覚が多分に含まれています。言葉のリズムや掛け合いのテンポ、俳優の声の高さに至るまで、角さんの感覚は観る人の心地よさを追求します。観劇するという行為は、その瞬間目の前で行われていることを暗闇の中で感じる。劇場全体の作用の中に自分も居るように没入することだと言います。〝観る〟を超越した〝居る〟に至る没入感を生み出すために、演出の立場ではもちろんのこと、作家として作品をつくる段階から意識していると角さんは話します。

今後は、「劇場で出会う文学」の続編や会話劇だけではない作品づくり、名立たる劇作家たちが集まる「劇作家フェスティバル」などを予定。作品をつくりたい一心だと語る角さんは、人々に癒しや生きる糧を与えるべく、より多くの人に演劇を届けることを目指しています。

NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学　Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内20市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。

表紙の絵　岡山の玩具歴訪 vol.3

倉敷生まれのモダンな運動人形　文 玩具工芸社

倉敷市美観地区にある日本郷土玩具館では全国各地の郷土玩具が約1万点展示されている。昭和42年、外村吉之助の進言と玩具提供により開館した。初代館長は玩具コレクターでもあった大賀政章。同館は「即売部」を持ち、倉敷にまつわる言い伝えや伝統をもとにしたいくつかの玩具をスタッフたちで製作、販売していた（現在は休止中）。運動人形、船天神、土びな、ほおずき土鈴、蔵の形をした土製の貯金蔵、でんでん太鼓、手漉き和紙で作られた春駒など数点製作されていた。表紙になった「運動人形」と、そのほかの数点を紹介する。

・運動人形

今号の表紙になっている運動人形は近代以降の作品。2本の棒の間に糸を通し、木製の人形を吊るしている。持ち手を握ると、棒の間に張った糸のねじれが変化し、人形がくるりと回転する。人形は手・脚・胴体でパーツが分かれているので、カタカタとした不思議な動きが楽しい。

・羽島の舟天神

厚手の紙と千代紙を折って作られた船天神。竹串に糸で繋がれており、竹串を壁などに留め吊るす。船に乗り瀬戸内の海をゆらゆらと航海する菅原道真を模したものだろう。倉敷市羽島にある天満宮には菅原道真にまつわるこのような話がある。

右大臣としての位を追われて九州太宰府に左遷された菅原道真はその途中に、道明寺（大阪）に立ち寄って叔母の覚寿尼に会い、そのお礼に自画像を描いた。分かれを惜しんだ覚寿尼は、その後しばらく船路を共にした。梅花の香りにつられて船を降りるとそこには梅の花が満開に咲いた、小さな社があり、そこで梅の花を満喫した2人は東西に分かれ、その社には自画像が残された。現在も羽島天満宮には菅原道真の自画像が祀られている。

・倉敷の土びな

土製の非常にシンプルな形をした土雛。倉敷市玉島地域にある黒崎地区には黒姫という大変美しい娘がいた。あまりの美しさに都に召された黒姫は仁徳天皇の寵愛を受けていたが、皇后の嫉妬により故郷へ戻ることになる。黒姫を忘れられない天皇は皇后に偽って、吉備の国の黒姫を訪ねる。2人は楽しい日々を過ごす。別れた後、黒姫は天皇が残した歌「山県に蒔ける 青菜も吉備人と共にし摘めば楽しくもあるか」を思い、暮らしたとされている。

・倉敷のほおずき土鈴

ほおずきの形をした土製の鈴。振ると中に入った玉が動き、コロコロコロと土鈴特有の柔らかい音がなる。かつて倉敷地方では備中酸漿という名で盛んに栽培され売られていた。ほおずきは、四万六千日などの観世音菩薩の縁日でよく売られる風習があった。ほおずき土鈴は観音の妙智力で邪気を払うとの言い伝えもある。

玩具工芸社

「玩具」と「工芸」の間を発掘・探究・創作するユニット。メンバーは轆原ヨウスケ（COCHAE）と、久米土人形の復元や、なども工作舎で玩具製作を行う長友真昭。

編集後記

◆2024年は「森の芸術祭 晴れの国・岡山」が開催されたり、ファジアーノ岡山が悲願のJ1昇格を果たしたり、様々な活動がとても活発に展開された年だったと思います。◆当財団助成先の活動も県内のあちらこちらで活発に取り組まれ、地域を元気にしています。財団スタッフも可能な限り各活動に参加し、申請書だけではわからない活動の意義や工夫を肌で感じています。◆2025年度の教育文化活動助成の申請受付は昨年12月1日より始まっています（1月末〆）。財団スタッフは毎年300件近い申請書を読んでいます。どのような活動が申請されているのかわくわくエネルギーをいただいている時間となっています。◆当財団のWebサイトをご覧になったことはありますでしょうか。活動する際のヒントが盛りだくさんです。若干ニュース性には乏しい部分もある一方、手前味噌になりますがアーカイブとしては非常に充実しております。◆2003年度からの助成先の活動報告（検索機能あり）や当財団と関わりがあった方々の活動を始めたきっかけや想いが満載の記事「助成先を訪ね歩く」「財団と人」等、読み応えがあります。ぜひぜひお立ち寄りください。◆今年は瀬戸内国際芸術祭、岡山芸術交流が開催されます。大阪・関西万博と開催時期も重なっており、日本全国からサッカーファン、国内外の芸術祭ファンの方々が瀬戸内、岡山の地を訪れてくださるでしょう。これを機会に岡山の良さを多くの方に知っていただければと願っております。（S）

機関誌「ふえき」
読者アンケート
ご協力ください。

▼アクセスは
こちらから

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0806 岡山県岡山市北区広瀬町1番5号 株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL 086-221-5254　FAX 086-232-3190　URL https://www.fukutake.or.jp/
E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp

福武教育文化振興財団ウェブサイト

コミュニケーション・マガジン and F｜アンドエフ

教育文化活動助成成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 不易　vol.86　2025.1.25

編集・発行　公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作　株式会社吉備人
デザイン　久延 フミカ（ヒラガナ企画合同会社）
表紙画　タケシマ レイコ
印刷　研精堂印刷株式会社